

# Boundary Conditions for Direct Simulations of Compressible Viscous Flows

著者： Poinso, T. J. and Lele, S. K.  
 出典： *Journal of Computational Physics, Vol.101(1992), pp.1-24*  
 発表者： 田研究室 1253017 三宅 若

## 1 序論

例えば空を飛ぶ航空機からでる音波を計算しようとする場合、計算機資源は有限であるため、空全体を計算することはできないので、計算領域を設定する必要がある。そこで、人為的に打ち切った境界の値が重要となる。

流体の方程式には非粘性の Euler 方程式と粘性の Navier-Stokes 方程式（以下 NS 方程式）がある。NS 方程式は、Euler 方程式に粘性項を加えたものである。しかし、この粘性項が加わることにより、NS 方程式の取り扱いが難しくなる。Euler 方程式は熱や粘性によるエネルギー散逸がない場合のみ用いられるが、NS 方程式は全ての流体の運動を記述する。つまりは NS 方程式の境界条件を知りたいわけである。Euler 方程式の境界条件は特性の理論より得られる。そこで、NS 方程式=Euler 方程式+粘性項であるので、NS 方程式の境界条件=Euler 方程式の境界条件+粘性条件と、分けて考える。

## 2 特性の理論<sup>[1]</sup>

簡単のために、一次元のオイラー方程式を考える。ρは密度、uはx方向速度、pは圧力、eは全エネルギーとして、

$$\frac{\partial Q}{\partial t} + \frac{\partial E}{\partial x} = 0 \quad (1)$$

$$Q = \begin{bmatrix} \rho \\ \rho u \\ e \end{bmatrix}, E = \begin{bmatrix} \rho u \\ p + \rho u^2 \\ (e + p)u \end{bmatrix} \quad (2)$$

式1を次のように書き換える。γを比熱比、s = pρ<sup>-γ</sup>として、

$$\frac{\partial U}{\partial t} + A \frac{\partial U}{\partial x} = 0 \quad (3)$$

$$U = \begin{bmatrix} \rho \\ u \\ s \end{bmatrix}, A = \begin{bmatrix} u & \rho & 0 \\ \frac{c^2}{\rho} & u & \frac{p}{\rho s} \\ 0 & 0 & u \end{bmatrix} \quad (4)$$

Aの固有値をλ<sub>i</sub>、左固有ベクトルlとすれば、

$$l_i \cdot \frac{\partial U_i}{\partial t} + \lambda_i l_i \cdot \frac{\partial U}{\partial x} = 0 \quad (5)$$

対角化をすることによって、3つの常微分方程式として捉える。λ<sub>i</sub>は特性波の速度である。特性波の振幅はλ<sub>i</sub>l<sub>i</sub>・∂U/∂xであり、これをL<sub>i</sub>と表記する。

境界を出入りする波（特性波）のイメージは図1の通りである。図1中、赤丸で囲まれている波は、計算領域外部から来る波であるので、計算ができない。

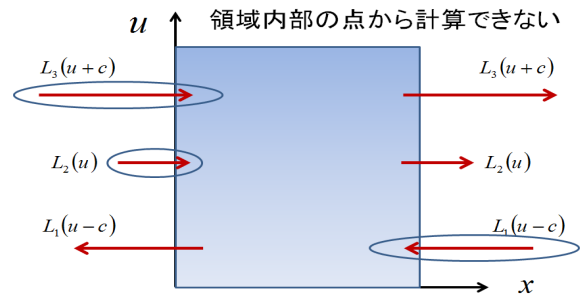


図1: 特性波のイメージ

## 3 LODI条件

LODIとはLocal One-Dimensional Inviscidの略である。境界上でのみ、波を一次元でかつ非粘性であるとする条件である。特性の理論の説明では一次元のオイラー方程式で理論を展開したが、ここでは、二次元のオイラー方程式を考える。vはy方向速度である。

$$\frac{\partial U}{\partial t} + A \frac{\partial U}{\partial x} + B \frac{\partial U}{\partial y} = 0 \quad (6)$$

$$U = \begin{bmatrix} \rho \\ u \\ v \\ s \end{bmatrix}, A = \begin{bmatrix} u & \rho & 0 & 0 \\ \frac{c^2}{\rho} & u & 0 & \frac{p}{\rho s} \\ 0 & 0 & u & 0 \\ 0 & 0 & 0 & u \end{bmatrix}, B = \begin{bmatrix} v & \rho & 0 & 0 \\ 0 & v & 0 & 0 \\ \frac{c^2}{\rho} & 0 & v & \frac{p}{\rho s} \\ 0 & 0 & 0 & v \end{bmatrix} \quad (7)$$

本来、二次元の問題であれば、式6の左辺の全ての項に特性の理論を適用すべきであるが、今回は一次元として捉えているので、

$$\frac{\partial U}{\partial t} + A \frac{\partial U}{\partial x} = 0 \quad (8)$$

に対して特性の理論を適用する。すると、以下の関係が得られる。L<sub>xi</sub>(i = 1, 2, 3, 4)は速度λ<sub>xi</sub>(i = 1, 2, 3, 4)を持つ特性波の振幅であり、次式で表される。

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \frac{1}{c^2} \left[ L_2 + \frac{1}{2} (L_4 + L_1) \right] = 0 \quad (9)$$

$$\frac{\partial p}{\partial t} + \frac{1}{2}(L_4 + L_1) = 0 \quad (10)$$

$$\frac{\partial u}{\partial t} + \frac{1}{2\rho c}(L_4 - L_1) = 0 \quad (11)$$

$$\frac{\partial v}{\partial t} + L_3 = 0 \quad (12)$$

$$L_{x1} = \lambda_{x1} \left( \frac{\partial p}{\partial x} - \rho c \frac{\partial u}{\partial x} \right) \quad (13)$$

$$L_{x2} = \lambda_{x2} \left( c^2 \frac{\partial \rho}{\partial x} - \frac{\partial p}{\partial x} \right) \quad (14)$$

$$L_{x3} = \lambda_{x3} \frac{\partial v}{\partial x} \quad (15)$$

$$L_{x4} = \lambda_{x4} \left( \frac{\partial p}{\partial x} + \rho c \frac{\partial u}{\partial x} \right) \quad (16)$$

固有値（速度）は次のとおりである。

$$\lambda_{x1} = u - c, \quad \lambda_{x2} = \lambda_{x3} = u, \quad \lambda_{x4} = u + c \quad (17)$$

式9から式12より、各  $L_i$  の関係が得られるので、先述した外部領域からくる波の振幅が計算できるようになる。

## 4 低レイノルズ数ポアズイユ流れへの実装

### 4.1 計算領域

計算領域は図2の通りである。ダクト半幅が  $l$  で、 $x$  方向長さ  $L_x = 10l$  である。



図2: 計算領域

### 4.2 流入条件

流入条件は次式で表される流れとする。  $u_0$  は主流速度、  $T_0$  は 293.15[K] であり、壁面温度でもある。

$$u(0, y, t) = u_0 \left[ \cos\left(\frac{\pi y}{2l}\right) \right]^2 \quad (18)$$

$$v(0, y, t) = 0 \quad (19)$$

$$T(0, y, t) = T_0 \quad (20)$$

Ma=0.1, Re=15 である。

### 4.3 計算手法

(1) Ruby と Strikwerda の方法<sup>[4]</sup>

流出境界において  $\rho, u, v$  は外挿で決める。圧力は  $\sigma = 0.58$  として、次式で求める。

$$\frac{\partial p}{\partial t} - \rho c \frac{\partial u}{\partial t} + \frac{\sigma(1 - Ma^2)}{l}(p - p_{infty}) = 0 \quad (21)$$

(2) NSCBC

流出境界において、無限遠圧力を  $p_\infty$  として、  $L_1$  を  $\sigma = 0.25$  として次式で求める。

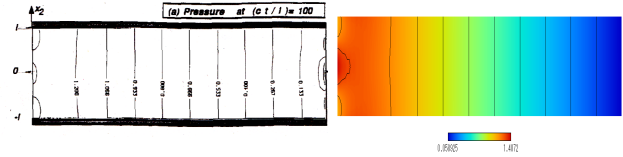
$$L_1 = \sigma c \frac{(1 - Ma^2)}{l}(p - p_\infty) \quad (22)$$

また、Dutt の提案<sup>[4]</sup> より、

$$\frac{\partial \tau_{xy}}{\partial x} = 0, \quad \frac{\partial T}{\partial x} = 0 \quad (23)$$

### 4.4 計算結果

紙面の関係上、結果の図を示すことはできないが、Ruby と Strikwerda の方法では、流出部で異常な圧力分布、温度分布が見られ、速度分布は壁面近くで異常であった。一方、NSCBC で計算した方は、厳密解に近い結果が得られていた。



(a) Ruby and Strikwerda

(b) NSCBC

図3: 圧力  $p$

### 4.5 まとめ

- NSCBC は多次元の問題を一次元として捉えているため、完全な境界条件とは言えない。
- 実装が容易であり、また経験上、頑健である。

### 参考文献

- [1] Time Dependent Boundary Conditions for Hyperbolic Systems, Kevin W. Thompson, Journal of Computational Physics 68, pp.1-24(1987)
- [2] J. C. Strikwerda, Commun. Pure Appl. Math. 30, 797(1977)
- [3] P. Dutt, SIAM J. Numer. Anal. 25, 2, 245(1988)
- [4] D. H. Ruby and J. C. Strikwerda, J. Comput. Phys. 36,55(1980)